

結 語

1 出土瓦当が示す桂宮の年代

『三輔黄図』には「桂宮、漢武帝造る」と記載される。前漢中・後期に、桂宮は后妃の宮室として使用され、『漢書』外戚伝には、ここで后妃が活動した記載が多く見える。そして、王莽が殺害され、新の王莽政権が滅亡した後、『後漢書』劉玄・劉盆子列伝に、「大縦火烧宮室（大いに火を縦^{はな}って宮室を焼き）」、「城郭皆空、白骨蔽野（城郭は皆空しく、白骨は野を蔽^{おお}い）」と記すように、赤眉の乱のため、首都長安は廢墟となった。

后妃の宮室

上述の文献史料は、桂宮が漢武帝の時期に造営され、王莽の末年に破壊されたことを示している。桂宮の漢代遺物包含層から出土した遺物には、年代が前漢より下るものがなく、大多数は前漢中期から王莽末年に属する。これらの遺物には、年代的特徴を示す銭貨や玉牒のほか、多くの瓦磚などが含まれている。とくに瓦磚は、秦漢時代の都城における重要な遺物であり、年代の基準となるとともに、出土数の多さや分布範囲の広さの点でも重視すべきである。

武帝期に造営

桂宮から出土した瓦磚の中では、やはり瓦当が年代の特徴をよく示しており、最も重要である。本書で報告する桂宮出土の瓦当は546点（瓦当範1点を含む）で、瓦当の形状から区分すると、円瓦当543点、半瓦当3点となる。瓦当面が文様か文字かで区分すると、文様瓦当497点、無文瓦当1点、文字瓦当48点である。

文様瓦当の内訳は、雲文瓦当490点（瓦当範1点と半瓦当2点を含む）、樹木文瓦当と動物文瓦当が各1点、渦文瓦当2点、葵文あるいは変形葵文瓦当3点である。1点の雲文瓦当範と2点の雲文半瓦当を除くと、雲文瓦当は487点あるが、その内訳は、Ⅲ型雲文瓦当296点、Ⅳ型雲文瓦当191点となる。

瓦当の内訳

また、48点の文字瓦当は、「右空」瓦当1点、「與天無極」瓦当10点、「千秋萬歳」瓦当9点、「長生無極」瓦当18点、「長生未央」瓦当2点、「延年益壽」瓦当1点、字体が不明瞭または不完全なもの（わかるものに「無極」「長生」「未央」などがある）7点である。

比率から見ると、円瓦当は瓦当総数の99.5%を占める。また、文様瓦当は瓦当総数の91.0%、文字瓦当は8.8%となる。文様瓦当の中では、雲文瓦当が総数の98.6%を占めている。

前漢中・後期に造られた漢宣帝の杜陵は、1980年代初頭に、陵園の門闕、寝園の寝殿と便殿などの大規模な発掘調査を実施した。そこでは瓦当470点が出土し、内訳は雲文瓦当17点、文字瓦当390点であった。それぞれの比率は、瓦当総数の3.6%と83.0%となる。⁽¹⁾

また、未央宮^{びおう}は前漢初年に造営が開始され、城壁西南角樓の発掘調査で大量の瓦当が出土した。完形あるいは復元可能な瓦当の総計は95点ある。そのうち雲文瓦当は73点で、瓦当総数の76.8%を占める。文字瓦当は2点で、瓦当総数の2.1%である。残り20点の瓦当が総数の21.0%にあたるが、その文様は葵文・変形葵文・蕉葉文・花卉文・鳳鳥文・水渦文・連環雲文であり、そのうち水渦文瓦当は9点で、瓦当総数の9.5%である。⁽²⁾

Ⅲ型とⅣ型の雲文瓦当

漢長安城出土の雲文瓦当の型式分類に基づくと、桂宮から出土した雲文瓦当487点は、すべてⅢ型とⅣ型の雲文瓦当である。一方、未央宮城壁西南角楼から出土した雲文瓦当のうち、Ⅰ型は3点、Ⅱ型は7点、Ⅲ型は44点、Ⅳ型は19点である。また、漢杜陵陵园から出土した17点の雲文瓦当は、すべて漢長安城のⅢ型とⅣ型の雲文瓦当に属する。

上述の数値は、前漢中・後期の宮殿や皇帝陵などの皇室建築から出土する雲文瓦当が、一般にⅢ型とⅣ型で、Ⅰ型とⅡ型は見られないことを示す。これに対して、前漢前期に創建された未央宮城壁西南角楼では、Ⅰ型とⅡ型の雲文瓦当が出土している。また、皇室建築における文字瓦当は、前漢中・後期、とくに後期の遺跡からの出土が比較的多い。中期の遺跡からの出土は比較的少なく、前期の出土数はさらに少ない。

瓦当が示す年代

桂宮出土瓦当が示す年代的特徴は、新の王莽の時期の貨泉、貨布、布泉、大泉五十などの銭貨や玉牒などの遺物とともに、桂宮が前漢中期に造営され、前漢中・後期から新の王莽の時期にかけて使用されたことを示している。桂宮の発掘調査で、焼けた遺物や遺構が発見されたことは、この宮城が焼失したことを証明するものである。文献史料によれば、『漢書』王莽伝・下に、新の王莽政権が滅亡した際、「赤眉はついに長安の宮室や市街を焼き、更始帝を殺害した。民は飢えて互いに食いあい、死者数十万。長安は廢墟となって、城内には行き交う人の影が見られなかった」とある。漢の長安城は、戦火に遭って廢墟となったのである。

戦火で焼失

2 桂宮に反映された后妃宮城の形態

南向きの宮城建築

桂宮の平面は長方形で、ボーリング調査によると、宮城内の大型宮殿建築は主として桂宮の中・南部に分布しており、桂宮の正門「龍楼門」はすなわち桂宮の南門であった⁽³⁾。これにより、桂宮は南向きの宮城建築と判断することができる。現在判明している桂宮の遺構の平面配置から見ると、桂宮1号・2号建築は桂宮における主体的な建築であり、これらは桂宮の南部にあって、やや西に偏るが、基本的には宮城の中軸上に位置する。

南北に長い長方形平面

一方、ボーリング調査で明らかとなった漢長安城の北宮の平面もまた長方形であり、その規模は南北1,710m、東西620mである⁽⁴⁾。北宮の詳細な状況については、さらなる考古学的調査による究明が待たれるが、漢代以後、たとえば隋唐長安城の掖庭宮^{えきてい}など、いくつかの都城における后妃宮城もまた南北に長い長方形の平面をもつ。

桂宮の大型宮殿建築群は宮城の南部にあり、中でも主体的な建築である桂宮1号・2号建築はその南部に位置している。これらの宮殿建築と桂宮南城壁との間にはほかの建築がなく、その東西両側と北部に数多くの建築が分布する。そして、大型宮殿建築群の北部には、たとえば倉庫である桂宮3号建築、後宮の付属的な建築物である桂宮4号建築など、桂宮のその他の建築遺構が分布している。

3 漢代の后妃宮殿建築の特徴

漢代の后妃宮殿建築（后妃陵寢建築を含む）で発掘調査がおこなわれたものとしては、漢長安城未央宮椒房殿^{しょうぼうでん}、桂宮、長樂宮などがあり、このほかにも漢宣帝杜陵の王皇后陵寢殿建築などがある。

る。これらの建築遺跡では、地下室や半地下室が配置されたり、特徴的な文字瓦当が出土したりしている。

漢長安城未央宮の皇后宮殿である椒房殿の正殿の西北部には、地下室F1がある。これは、版 地 下 室
 築基壇を掘り込んだもので、幅8.7m、奥行3.6m、面積31.3㎡、残存高0.6mである。もとの室内の高さは2.5m以上と推測され、この北側は、南北方向の通路で1号庭院とつながっている。また、椒房殿配殿からは5本の地下道が発見された。それぞれの規模は、1号地下道が長さ13.0m、幅1.6m、南北両壁の残存高1.5m、2号地下道が長さ13.5～14.4m、幅0.7～1.4m、残存高1.2m、3号地下道が長さ27.2m、東西幅1.0～1.3m、東西両壁の残存高1.4～1.8m、4号地下道が長さ27.2m、幅0.9～1.5m、東西両壁の残存高1.2～1.7m、5号地下道が長さ7.3～11.1m、幅1.3m、両壁の残存高0.9mである⁽⁵⁾。そして、恵帝以降、前漢王朝の「太后之宮」(皇太后の宮殿)であつた長樂宮の宮殿建築でも、地下あるいは半地下の建物が多くの場所で発見されている⁽⁶⁾。

桂宮2号建築南院の正殿基壇の北部には、地下室F2がある。正面幅6.8m、奥行4.1m、面積27.7㎡で、地下室の底面は残存する正殿基壇上面より0.5～0.6m低い。正殿基壇の東部にも地下室F3があり、平面は方形で、一辺の長さ6.9m、面積47.6㎡、四方の壁の残存高は1.0～1.1mである。地下室は、南北にそれぞれ地下通路でつながっている。南通路は長さ6.0m、幅2.4m、地 下 通 路
 東西両壁の残存高0.8～1.1mである。北通路は長さ5.4m、幅2.2m、東西両壁の残存高0.9～1.0mである。

桂宮2号建築北院の正殿基壇にも、地下室F2がある。平面は方形で、一辺の長さ5.6m、面積31.4㎡、四方の壁の残存高は0.8～0.9mであつた。F2は南側に通路をもつ。また、この西方、北院正殿基壇の中央からやや西には地下通路があり、長さ19.5m、幅1.8m、東西両壁の残存高1.2～1.3mである。

桂宮4号建築では、西部大型建物の西南部に半地下室F1がある。長さ9.3m、幅7.2m、面積 半 地 下 室
 66.8㎡、四方の壁の残存高は0.5mである。また、東部大型建物の中央にも地下室F2があり、正面幅3.2m、奥行5.3m、面積17.0㎡、四方の壁の残存高は0.7～0.9mであつた。この東方には地下室F3があり、正面幅6.8～7.2m、奥行6.0～6.2m、面積42.6㎡、四方の壁の残存高は1.0～1.2mである。

以上のように、前漢時代の後妃宮室建築の多くは、地下室と地下通路、あるいは地下道をそなえていた。これらの施設は、おそらく后妃宮室建築の性格と一定の関係を有していたのであろう。というのは、すでに発掘調査がおこなわれた、ほかの後妃以外の漢代宮室建築からは、今のところ、上述したような地下室や地下通路、あるいは地下道などの遺構は発見されていないからである。

前漢中・後期の后妃宮殿建築遺跡から出土する文字瓦当には、「長生無極」瓦当が多く見られる。たとえば、前漢宣帝の杜陵陵园の東門から出土した文字瓦当127点(瓦当完形品の総計、以下同じ)では、そのうち「長樂未央」瓦当が118点あり、出土した文字瓦当総数の92.9%を占める。「長生無極」瓦当は9点で、7.1%である。また、杜陵陵园の北門から出土した文字瓦当は30点で、そのうち「長樂未央」瓦当は28点と、出土した文字瓦当総数の93.3%を占める。「長生無極」瓦当は2点で、6.7%である。さらに、杜陵寝園から出土した165点の文字瓦当は、すべて「長樂未央」瓦当であつた。また、王皇后陵园東門から出土した文字瓦当は45点で、そのうち「長生無

「極」瓦当は26点あり、出土した文字瓦当総数の57.8%を占める。「長楽未央」瓦当は19点で、42.2%である⁽⁷⁾。一方、漢長安城未央宮の椒房殿から出土した文字瓦当は69点で、そのうち「千秋萬歳」瓦当は2点、「長楽未央」瓦当は23点、「長生無極」瓦当は44点あり、これらはそれぞれ、出土した文字瓦当総数の2.9%、33.3%、63.8%にあたる⁽⁸⁾。

「長生無極」
瓦当が多数

漢長安城の桂宮2号建築から出土した文字瓦当は30点あり、そのうち「右空」瓦当が1点、「與天無極」瓦当が3点、「千秋萬歳」瓦当が8点、「長生無極」瓦当は18点（文字が不明瞭なもの2点を含むが、わずかに残った文字の痕跡から、おそらく「長生無極」瓦当と思われる）であった。これらは順に、出土した文字瓦当総数の10.0%、26.7%、60.0%にあたり、「長生無極」瓦当が多数を占めている。

このように、前漢中・後期の后妃の宮殿や陵寢建築においては、使用される文字瓦当は「長生無極」瓦当が比較的多いという特徴がある。桂宮2号建築から出土した文字瓦当が示す状況は、まさしくその年代が前漢中・後期であり、それらの性格が后妃宮殿建築であったことを如実に物語っている。

4 桂宮2号建築が反映する漢代の宮殿制度

桂宮2号建築は南院と北院から構成され、北院の北にはさらに版築高台がある。南院の中心的な建築は正殿で、前面に二つの階段をもち、正殿の前方には「前庭」、正殿後方には「庭院」を配している。これは、典型的な朝政の場所であることを示す。また、北院は多くの庭院によって構成された建築群であり、南部は三つの庭院、北部は二つの庭院がそれぞれ東西に並び、その間は地下通路でつながっていた。

「前堂後室」

南院が后妃の朝政活動の場所であるならば、北院は后妃が日常生活を営む場所（寢居）といえよう。朝政正殿は南院の南と中央にあり、后妃の寢居は正殿の後方にあったのである。このように、桂宮2号建築には「前堂後室」、「前朝後寝」の基本的な配置がうかがえ、皇帝の建築にとどまらず、后妃の主要宮室建築もこの制度に従っていたことがわかる。また、民間の「前堂後室」の建築配置も皇室建築の影響を受けていた。

「苑」類建築

桂宮2号建築の北部にある版築高台は、「苑」類建築に属し、やはり文献史料に記載された桂宮内の「土山」にあたる⁽⁹⁾。漢の武帝が造営した建章宮では、建章宮前殿が宮殿建築群の南部に配置され、その北には皇室の寢居、さらに北には大自然の山水を象徴する「蓬萊」（「漸台」とも称する）と「太液池」があった。建章宮と同年代である桂宮2号建築南院の正殿と北院の寢居、北院の北の「土山」は、設計者が追求した、人と自然が調和する建築理念を反映している。こうした建築設計思想は、中国古代建築に大きな影響を及ぼしていたのである。

（1）中国社会科学院考古研究所『漢杜陵陵園遺址』科学出版社、1993年

（2）中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮 1980～1989年考古発掘報告』中国大百科全書出版社、1996年。

（3）劉慶柱・李毓芳『漢長安城』文物出版社、2002年。

（4）中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城北宮の勘探及其南面磚瓦窯の発掘」『考古』1996年第10期。

- (5) 中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮 1980～1989年考古發掘報告』前掲註2。
- (6) 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城長樂宮第二号建築遺址發掘簡報」『考古』2004年第1期。
- (7) 中国社会科学院考古研究所『漢杜陵園遺址』前掲註1。
- (8) 中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮 1980～1989年考古發掘報告』前掲註2。劉慶柱「漢長安城遺址及其出土瓦当研究」『古代都城与帝陵考古学研究』科学出版社、2000年。
- (9) 『三輔黄圖』が引く『関輔記』逸文に「桂宮は未央の北に在り。中に明光殿の土山有り」とある。